

# 令和3年度 益子町立益子西小学校 学校評価書

## 教育課程 外国語活動・外国語科編

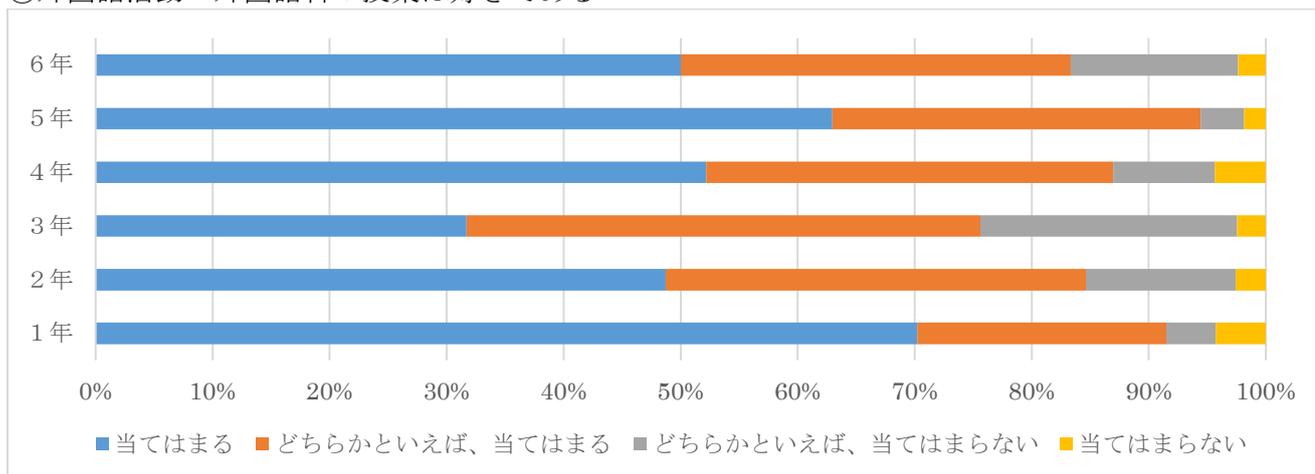
### < 具体の評価指標 >

- ・教育課程の適切な実施の下に、学校は明るい雰囲気児童は生き生きと生活している。
- ・外国語活動・外国語科に対する興味・関心、外国語の表現への慣れ親しみ、コミュニケーション能力の育成が十分図られている。

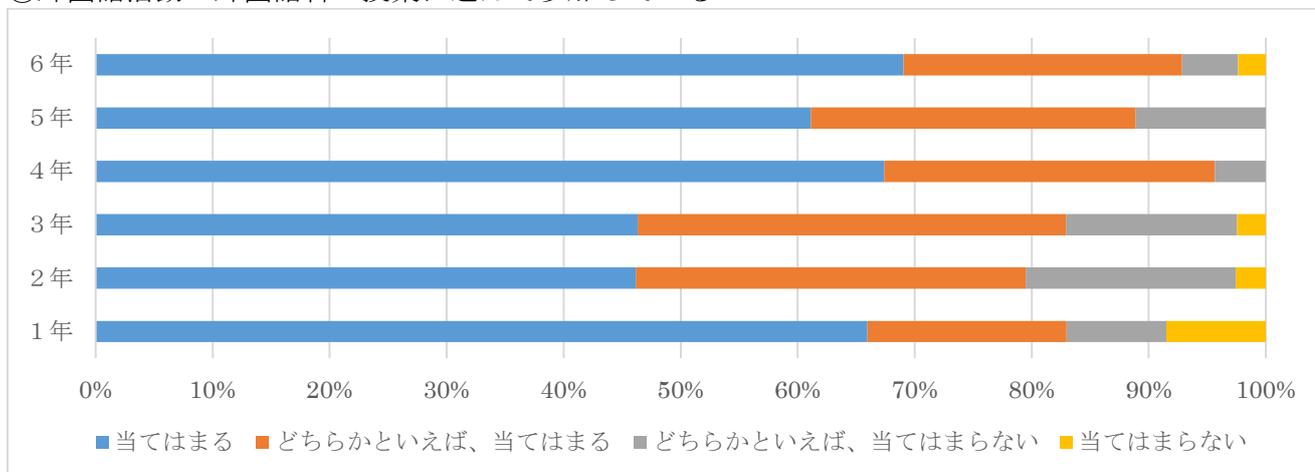
### ①自己評価

(1) 児童の意欲について（令和3年12月実施のアンケート結果より）

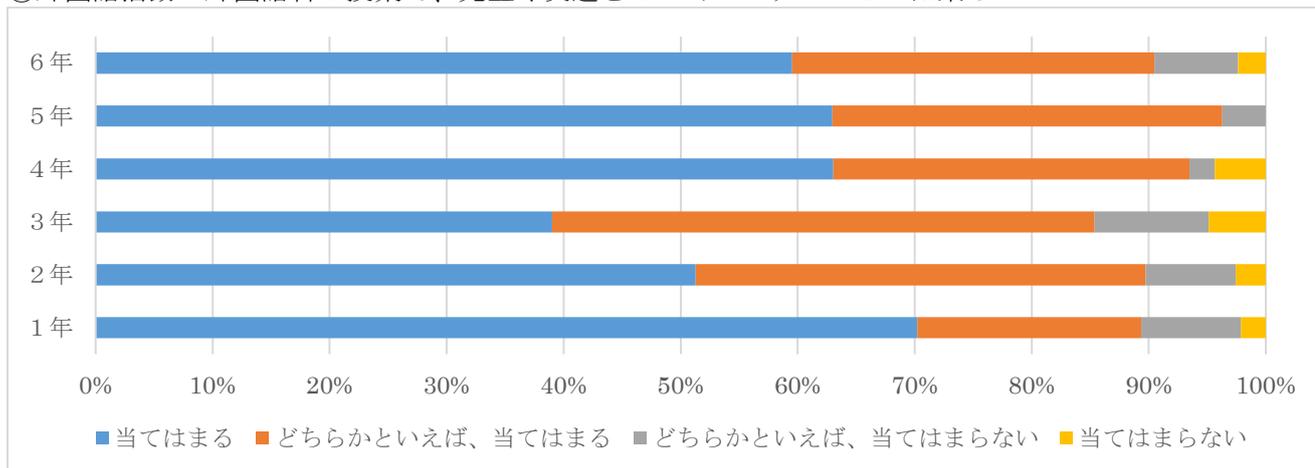
#### ①外国語活動・外国語科の授業は好きである



#### ②外国語活動・外国語科の授業に進んで参加している



#### ③外国語活動・外国語科の授業で、先生や友達とのコミュニケーションは楽しい



### 〈成果〉

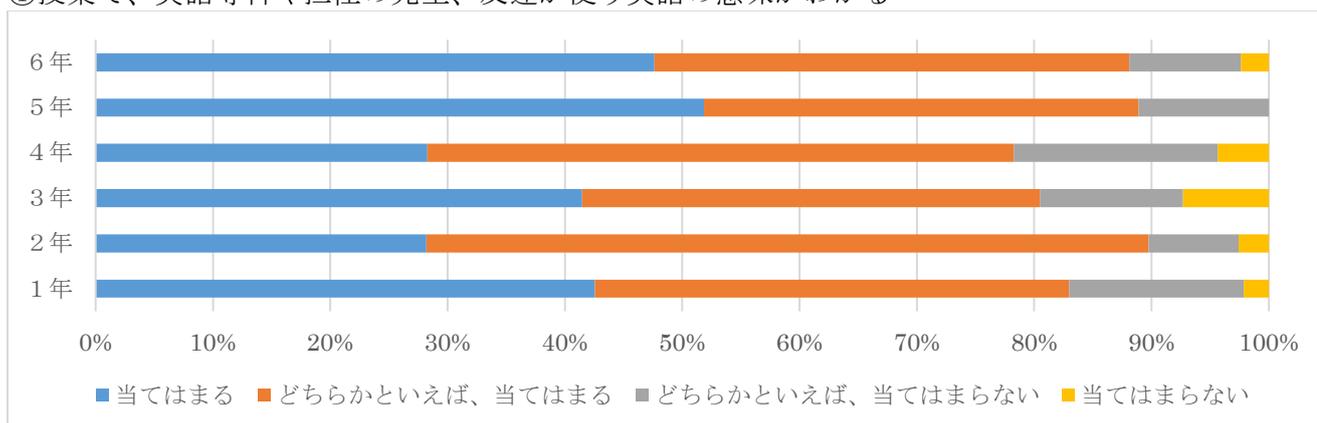
- ・上記3項目において、各学年の肯定的な回答が全て7割以上だった。多くの児童が外国語活動の授業に意欲的に取り組んでいることが分かる。また、先生や友達とのコミュニケーションは楽しいと感じている児童がとて多く、コミュニケーション活動にも意欲的に取り組んでいることが分かる。
- ・「先生や友達とのコミュニケーションは楽しい」では、肯定的な回答が全ての学年で8割以上だった。また、肯定的回答が下学年より上学年の方が多くなっている。このことから、多くの児童がコミュニケーションの楽しさを感じていることが分かる。コロナ禍で制限が多い中、試行錯誤しながらコミュニケーション活動に取り組ませてきたこと、伝える目的や場面・状況を明確にして言語活動を行ってきたことの成果だと考えられる。特に、令和3年度は栃小教研外国語部会の研究発表があり、伝える目的や場面・状況を明確にした言語活動に力を入れた。言語活動の充実を図ったことで、児童が目的に向かって学習することや児童のコミュニケーションへの意欲や達成感をもたせることができたと考えている。
- ・特に高学年において、ICTを活用した学習を多く取り入れた。発表資料を作成したり、ビデオメッセージを録画することで発話量や練習量を確保したりした。ICTを活用した授業を行ったことで、コロナ渦でも本物のコミュニケーションを経験させることができた。このことが、児童の授業への意欲を高めたと考えられる。

### 〈課題〉

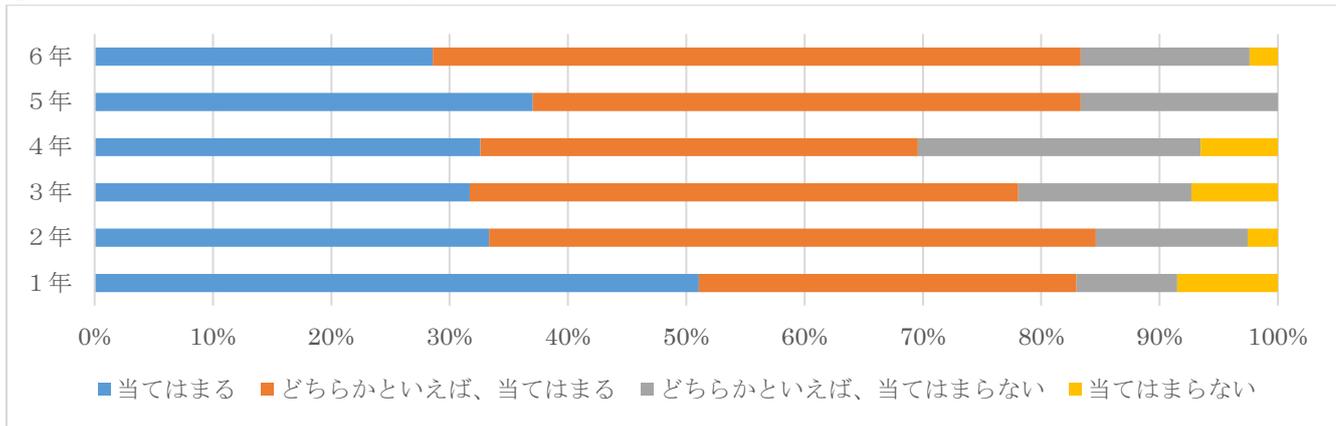
- ・今年度はコロナ禍の影響により対面やグループでのコミュニケーション活動を積極的に行うことができなかったため、児童が英語を使って自分の考えを伝える場面が昨年度に比べて少なかった。今後もこのような状況が続くと予想されるため、感染症対策を講じた学習活動でも自分の考えを伝えられるようなやり方や手立てを常に考えておく必要がある。
- ・上記3項目の肯定的回答の学年差は縮まってきているが、下学年の肯定的回答が少ない。下学年での授業改善や児童の意欲面への支援が課題である。特に、本格的に外国語活動の授業が始まる3年生が課題である。児童の「できた」「わかった」「楽しい」を引き出し、児童が自信を積み重ねていくことができるような授業展開が下学年では特に求められる。また、普段の学級の雰囲気や外国語活動や外国語科の授業に大きく影響するので、担任との連携を積極的に図る必要もある。

## (2) 児童の英語力やコミュニケーション力について（令和3年12月実施のアンケート結果より）

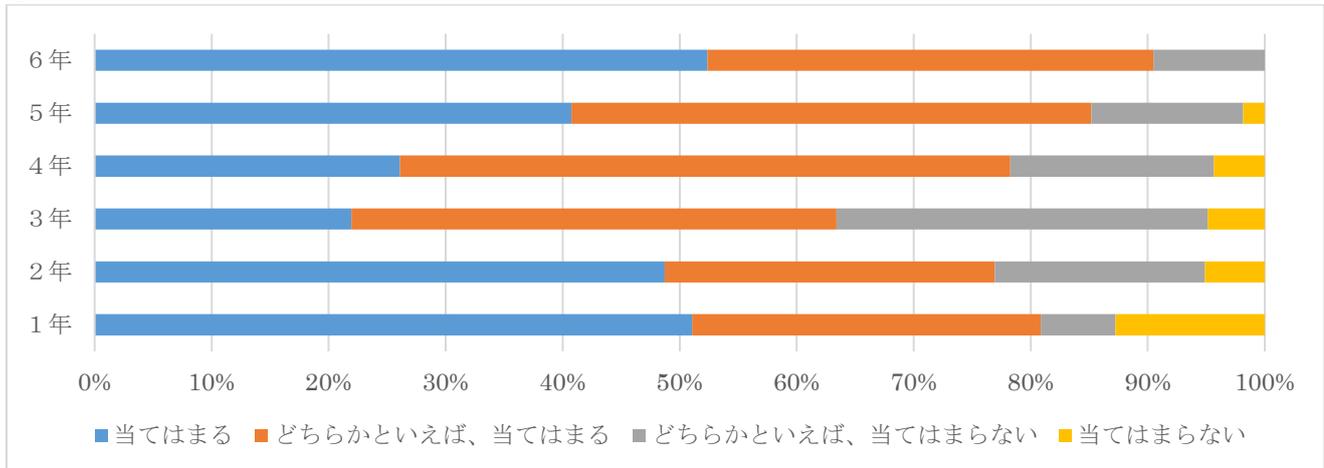
### ①授業で、英語専科や担任の先生、友達が使う英語の意味がわかる



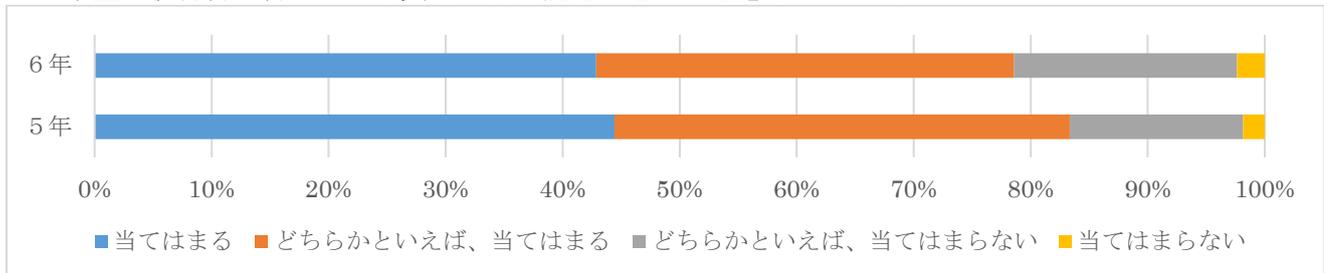
②授業で、ALT が使う英語の意味がわかる



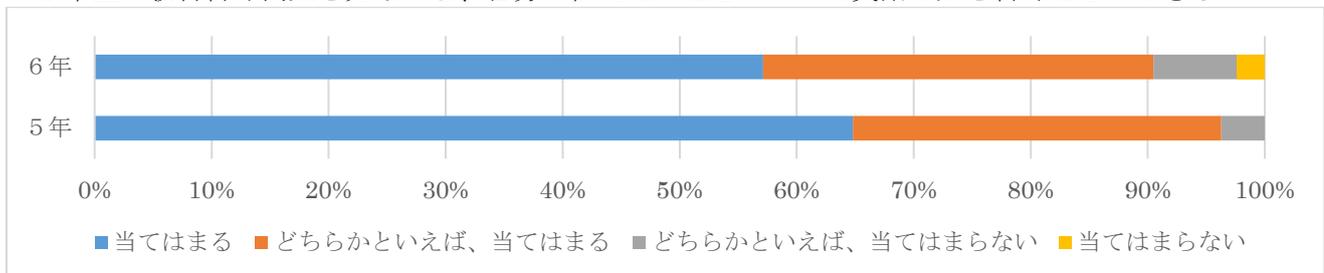
③友達に英語を使って自分の考えを伝えることができる



- ④ 5年生 英語で書かれた名前や教科書に出てくる言葉を読むことができる
- 6年生 教科書に書いてある英語の文を読むことができ意味がわかる



- ⑤ 5年生 アルファベットの大文字・小文字や簡単な単語を書くことができる
- 6年生 教科書や例文を見ながら、自分が伝えたいことについて英語で文を書くことができる



#### 〈成果〉

- ・担任や専科教員、友達が話す英語を理解している低学年と高学年は約8割、中学年は7割以上だった。ALTの話す英語も多くの児童が理解している。どの学年でも教師やALTが英語による簡単な指示や説明を用いながらの指導を継続してきた成果だと考えられる。また、どの学年の児童も友達やALTとの英語でのやり取りに積極的であることも関係していると考えられる。
- ・どの学年も7割以上の児童が英語で自分の考えを伝えることができることが分かる。各学年の実態に合わせたインタビュー活動やスピーチ活動を積極的に取り入れてきた成果だと考えられる。また、学年が上がるにつれて肯定的回答が増えているのは、コミュニケーション活動の系統性を意識した指導の成果だと考えられる。
- ・アルファベットや簡単な単語を読むことができる児童は約8割、書くことができる児童は約9割だった。外国語科で新たに始まった「読む」「書く」活動に児童が意欲的に取り組み、アルファベットや単語の読み書きなどが定着してきていることが分かる。（※小学校での書く活動は、アルファベットの読み書きと単語や英文を書き写す活動となっている。）

#### 〈課題〉

- ・担任や専科教員、ALTの話す英語への理解度が中学年では低くなっている。本格的な英語の学習が始まる中学年では、ALTの話す英語を児童が理解できるように、担任や専科教員が簡単な英語に言い直したり、児童にその都度確認したりしながら授業を行っていく必要がある。また、どのALTとでも授業ができるように、担任や専科教員の英語力の向上も必要である。
- ・教科書以外にも絵本などを積極的に活用し、簡単な英語に触れる機会や英語を聞く経験を増やすことで、児童の理解度を高めていく必要がある。